

# エコー型聞き返しの発話機能と 発話末イントネーションとの関係

梅木俊輔

## ◆要旨

**会** 話に生じる相手発話を繰り返す聞き返し（以下、エコー型聞き返し）は、発話者の相手発話に対する処理段階の異なりに応じ、「驚きの表示」、「不審・不満の表示」、「相手発話に対する面白がりの表示」、といった多様な発話機能を帯びる。各発話機能のエコー型聞き返しは、発話末イントネーションの操作、笑いの有無、相手の言い方に対する模倣の有無、といった表出上の特徴を持ち発せられる。表出上の特徴のうち発話末イントネーションの操作に基づくと、「驚きの表示」と「不審・不満の表示」は上昇調の相違から相互に位置づけることができる。よって両者の判別には発話末イントネーションを指針とすることが有効となる。

## ◆キーワード

エコー型聞き返し、発話機能、発話処理段階、理解の手がかり、発話末イントネーション

## ◆ABSTRACT

Based on the speech-processing hierarchy where speaker of echo-question treats the utterance from partner, the speech-function of echo-question in discourse of Japanese Language is expressed as the surprised response, the showing of unsatisfactory or doubt, and the enjoyment of partner's utterance. Each echo-question is uttered with such characteristics as the intonation of the final mora in each question, the presence of laughter and the imitation of partner's expression. Based on the intonation of the final mora in echo-question, the surprised response and the showing of unsatisfactory or doubt can be placed each other. Therefore, the intonation of the final mora is the effective feature to identify the function of echo-question.

## ◆KEY WORDS

echo-question, speech-function, speech-processing hierarchy, contextualization cues, intonation of the final mora in echo-question

## The Relationship in Speech-Function and Intonation of the Final Mora in Echo-Question.

SHUNSUKE UMEKI



聞き返しの受け手となった際に、相手となる日本語母語話者が使用する聞き返しが理解できないことについて考慮されていない。

data 2

J16a 3千円貸してや

J16b 3千円?

J16a うん

J16b 3千円?

J16a うん、3千円。すぐ返すけん。終わったら

J16b マジで?

J16a うん、あした。あしたの。学校で返すけん (アクドール・大浜 2008: 1)

上記の data 2 は日本人同士で行われている会話である。「3千円?」という聞き返しが2度発話されている。1つ目の「3千円?」については、聞き返しの受け手となる J16a は「うん」とのみ応答していることから、この聞き返しが「問題処理の方策」の1つに含まれる「聞き取り確認要求」(尾崎 1993: 21) であると説明できる。そうすると、2つ目の聞き返しである「3千円?」は一体何なのだろうか。既に「聞き取り確認要求」としての聞き返しに対しては、応答「うん」によって解決されているため、再度同じ聞き返しを行うことについて、もはや1つ目のように発話の聞き取り上の問題処理を目的としているとすることはできない。また、聞き返しの対象となっている発話の字義的意味が理解できないなどということも会話参加者が日本人であることから考えにくい。アクドール・大浜 (2008) では「日本人学生との会話で頻繁に見られる繰り返し」(下線、引用者加筆)の意図が十分に理解できず、それによって適切な応答に困難を感じる」(アクドール・大浜 2008: 2) と述べられている。ただ、会話におけるターンテイキングの観点からすると、相手側が単に(下降調で)繰り返しているだけであれば、質問とは違い、相手もターンの譲渡を明示的に行っていないため、仮に応答しなかったとしても、応答しなかったことが即問題視されない可能性もある。それに対し、質問のように明らかに上昇調で聞き返されている場合は、明示的にターンが相手へと割り当てられるため、もしその場合に聞き返しの受

け手が聞き返しの意図を十分に理解できない、それによって適切に応答できないということになると、会話の進行上より切実な問題となりうる。

大津 (2004) やアクドール・大浜 (2008) で示されているような聞き返しと、相手の話が聞き取れない、分からないという問題に直面し発せられる「問題処理の方策」としての聞き返しとの間で明確に異なる点は、聞き返しを行っている側の認知的な処理の違いにある。

話者の発話時における心的処理(心的な手続き)は、近年、「へえ」「えっ」「ええ」「あっ」「ああ」といった感動詞の発話機能を記述する際に注目されており(田窪 1992, 2005)、田窪 (1992) によると以下の例1および例2において、「へえ、はっ」は、共有状態の想定失敗により、相手の発話を正しく登録できなかったという状態を示す。(田窪 1992: 1117) とされる。これに対し、「へーえ、ふうん」というのは、共有状態の認知に関して、合意し、相手の情報が新規に登録されたことが前提になる(田窪 1992: 1117) と記述されている。

例1: え、たなかって、田中次郎のことですか。

例2: へーえ、たなかって、田中次郎のことだったんですか。

(田窪 1992: 1117)

ここで、田窪 (1992) により「登録できない」あるいは「登録された」と述べられている心的処理状態に関し、登録の対象となる発話の認識状態について考えると、登録の対象である発話が心内で復元されている(確定できている)かどうかという問題は、登録できるかどうかが決まる段階よりも前の段階で解決されていなければならないと言える。逆に言えば、発話が復元できていなければ、その発話について登録するかどうか判断できないわけである。したがって、登録するかどうかを判断する段階で行っている処理というのは、心内において復元された(確定済みの)発話に対して、何らかの判断を下すことであるということになる<sup>[註4]</sup>。

このような発話処理段階を基準に考えると、聞き返しは少なくとも、相手発話の復元に関わる段階、相手発話の受け入れ判断に関わる段階、相手発話の復元にも受け入れ判断にも関わらない段階、といった3つの処理段階に生じるも

のに分かれる。相手発話の復元に関わる段階とは、聞き返しの発話者が相手の発話を心内で復元できていない状態を示す。そして相手発話の受け入れ判断に関わる段階は、復元の段階が済み、その情報を自分のデータベースに取り入れるかどうかを判断している状態であり、さらに相手発話の復元にも受け入れ判断にも関わらない段階は、相手発話の復元自体は済んでいる状態ではあるが、データベースに取り入れるかどうかを判断しているのではない状態を示す。このような聞き返しの発話者における認知処理の観点からみると、従来の「問題処理の方策」としての聞き返しは相手の発話を心内で復元できていない状態を示すことから、相手発話の復元に関わる段階に生じたものとして位置づけられる<sup>[注5]</sup>。ではその他の段階に生じる聞き返しについては具体的にどのような機能を果たすものがあるだろうか。この点について明らかにし、聞き返しを理解する上での指針となる情報として提供することは、日本語母語話者が使用する聞き返しが理解できない、それによって応答が困難となる学習者にとって有益となると考える。

また聞き返しが会話で多様な役割を果たす一方、その中の1つの聞き返しとして受け手が理解し、応答することを考えると、受け手は聞き返しをどのようにして理解すればよいだろうか。確かに、コンテキスト（聞き返しが生じている前後の発話連鎖）は重要であるが、コンテキストだけからしか理解できないのだろうか。Gumperz (1982) は、個々の発話はそれが何であるか受け手が知るのに余分なコストがかからなくても済むように、手がかりとなる様々な外見上の特徴をもって発せられるとし、そのような理解上の手がかりを「contextualization cues」(Gumperz 1982: 131)と呼んでいる。Gumperzが述べる理解上の手がかりが聞き返しにもあるとすれば、その情報も学習者に与えることで理解上の手助けとなる可能性がある。

## 3 研究の目的と方法

### 3.1 目的

本研究は日本語母語話者の雑談に生じるエコー型聞き返しを対象に、「問題

処理の方策」以外に、どのような役割を果たしているかを明らかにするとともに、異なる役割を果たす聞き返しを受け手が理解する上で指針となる情報を検討することを目的とする。ただ本稿では紙面の都合上、前述した3つの発話処理段階のうち、「相手発話の受け入れ判断に関わる段階」に生じる聞き返しを中心に扱い、「相手発話の復元にも受け入れ判断にも関わらない段階」に生じる聞き返しについては機能の1つに含まれる「面白がりの表示」を例示するに留める。よって聞き返しの理解上、指針となる情報についても、「相手発話の受け入れ判断に関わる段階」に生じる聞き返しに関する内容に絞って述べることにする。

### 3.2 方法

聞き返しの発話機能の分析にあたり、インタラクションの社会言語学（以下、IS）の研究枠組みに基づき分析を行った。分析で重視した点は言語使用を伴うある現象の認定において、焦点となる現象を会話状況に生じた結果として、その結果が会話参加者間に顕在化されている具体的行為から達成されているプロセスを明らかにすることである。具体的には、まず採集した聞き返し例を前述の発話処理段階により相手発話の復元に関わるか否かで分けた後、復元に関わらない例に観察される言語的特徴と、会話分析手法を用いて聞き返し直後での受け手による反応のあり方や聞き返しが生じる前後の発話連鎖等の共通点を列挙し、各例の発話機能を記述・分類していった。本稿で示す分類の結果は分析結果案を他者（日本語教育学専攻の大学院生11名）に提示して検討を求め、出された意見をもとに再度検討を加える経緯を重ねてまとめたものである。

### 3.3 データ

多様な聞き返しが見られる自然な会話データを得ることに配慮し、日本人大学生による親しい友人同士による2者間での雑談を録音した（2009年7月～8月）。20代の男女10名（男性：4名、女性6名）にICレコーダーを渡し、レコーダーの操作は会話参加者に任せ、録音場所や時間制限はしていない<sup>[注6]</sup>。よって雑談の行われた場所は大学内教室、自宅等様々で、録音時間も30分から50分くらいまでと幅がある。以上の方法により10組分の雑談音声（約8時間）を収集し

た。録音後の文字化に使用した記号はGail Jeffersonにより開発されたものをベースに若干の改定を加えたもの(串田・定延・伝2008: xiii-xxi)を使用した。聞き返しの音声的特徴の分析には、録音後、wave方式(量子化16bit/サンプリングレート44.1kHz)でパソコンに取り込み、SUGI Speech Analyzerを用いた。

## 4 分析結果

### 4.1 エコー型聞き返しの発話機能

分析の結果を下記表1に示す。聞き返しの発話機能は聞き返しが発せられる発話処理段階に応じ、従来の「聞き取れない・字義の意味が分からない表示」の他、「驚きの表示」、「不審・不満の表示」、「面白がりの表示」、「時間稼ぎの表示」、「進行催促の表示」、といった機能があることが分かった。

以下では表1に示す発話機能のうち、「驚きの表示」、「不審・不満の表示」、「面白がりの表示」に関する具体例と分類の根拠となった現象に関する記述を例示する。その後、話し手による韻律の操作が「驚きの表示」および「不審・不満の表示」に対する判別上の指針となることを述べる。

### 4.2 驚きの表示

下記data3に見られる0296A「昼?」という聞き返しは、0294Aに「>けっこう夜遅かったの:<」があることから、発話者が発話時において直前の相手発話とは異なる想定をもっており、直前の相手発話の受け入れに対する判断において、そのまま受け入れられなかったこと、つまり、驚きを示していると思われる。

表1 エコー型聞き返しの発話機能

発話処理段階	発話機能(総数:76)
相手発話の復元に関わる	聞き取れない・字義の意味が分からない(35)
相手発話の受け入れ判断に関わる	驚き(13)、不審・不満(9)
相手発話の復元にも受け入れ判断にも関わらない	面白がり(14)、時間稼ぎ(3)、進行の催促(2)

data 3

- 0287B 40分ぐらい
- 0288A h h h h
- 0289B 味噌ラーメン
- 0290A 長いこと:
- 0291B 何なら閉めかけたんじゃないかってところから
- 0292A h h h
- 0293B 必死に作っていただきまして
- 0294A お:なるほどね:>けっこう夜遅かったの:<
- 0295B 昼ですよ昼
- 0296A 昼?
- 0297B うん(.) 正にランチタイム(.) 1時とか
- 0298A あ:そう
- 0299B うんだから超あの:食べたんでしょね30人ぐらいだからいっぱい来て
- 0300A あ:なるほどね

data 3における0291B、0293Bの発話から、Bは注文したラーメンが出てくるまでに時間がかかった理由として、店じまい前に入ったからかもしれないと考えていることが分かる。このBの推測に対しAは、0294Aで「お:なるほどね:」と納得を示した上でさらにBの推測を妥当なものにする推測「>けっこう夜遅かったの:<」を述べる。しかしここでBがラーメン屋の様子を話題にしているもう1つの理由が明かされる。それは注文の品が出てくるまでに時間がかかったというだけでなく、しかもそれが昼どきであったことがBによって明らかにされる。Aによる聞き返し(0296A「昼?」)が生じるのはその直後である。

ここで生じている聞き返しの音声的な特徴を示したものが下記図1である。

横軸は時間を示し(1秒あたりの表示幅を1000とする同時軸で表示)、縦軸は周波数(対数表示)を示す(以下、同様)。図1の通り、0296A「昼?」という聞き返しは発話末イントネーションが発話最終拍「る」で急激に上昇する。

こうした上昇形式は次のdata4に示すような、聞き取れない・字義の意味が分からない聞き返しの上昇調とは顕著に異なるものである。

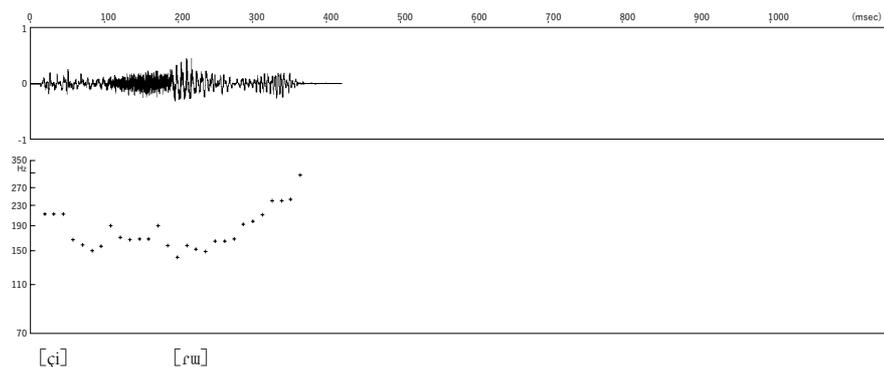


図1 「驚き」のピッチ変動

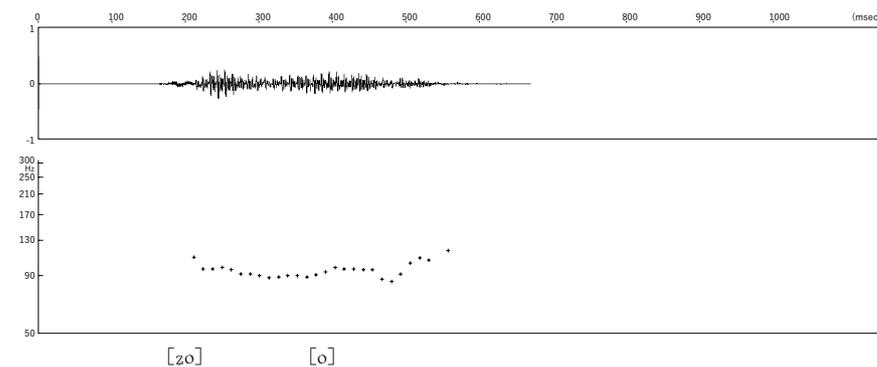


図2 「聞き取れない・字義の意味が分からない表示」のピッチ変動

data 4

- 0817B 俺かみじゆうすけの魅力が分かんない
- 0818A あ：でもな最初はかっこいいと思った最初かっこいいと思ったし：最初おもしろ  
と思ったけど：
- 0819B うん
- 0820A ま：特に：なんか（.）ジョオーって分かる？
- 0821B うん？ジョオー？
- 0822A うん
- 0823B え
- 0824A あの：なんだっけあおいさわことかがさ：
- 0825B うん
- 0826A 出たた（.）ドラマがあって：
- 0827B うん

つまり data 4 のように、相手発話を心内で復元できていない状態で発せられる聞き返しは、下記図2のように発話末で上昇するものの、図1が示すような急激な上昇は見られない。ただし聞き返しの音声的特徴は採集した全ての例において分類カテゴリーごとの類似を検証した結果ではない。今回のデータには

会話参加者の発話の重なりや音声以外の雑音等も含まれ、図2のピッチ変動の図のように示せない例については、示せる例との上昇調に対する聴覚的印象の類似を筆者が主観的に判定した。聞き返しの音声の特徴において分類カテゴリーごとの類似を検証することは今後の課題としたい。

### 4.3 不審・不満の表示

下記 data 5 の聞き返しは、data 3 のように単に相手発話を受け入れられなかったことを示すというより、受け入れることに対する抵抗、すなわち不審・不満を示しているものと考えられる。

data 5

- 0884B h h なんじゃワールド（.）っていうのを
- 0885A それ（.）パクってるよね？ h h h
- 0886B いや
- 0887A h h h あったよね？ なんか：
- 0888B [なんじゃワールド]
- 0889A [なんじゃタウン] みたいななかったっけ：
- 0890B いや（.）なんじゃワールドですね

→0891A え：なんじゃワールド：？

data 5でAはBが発案したと述べる新しいテーマパークの名前に関し、剽窃の念を抱いている。これに対しBは、ただ0890B「いや」と述べるのみで、「なんじゃワールドですね」と押し切る。Aによる聞き返しが生じるのはこのBが押し切る発話の直後であるが、ここでAがBによる直前の発話をそのまま受け入れているとは考えにくく、さらにdata 5に0885A「それ(.)パクってるよね？ h h h」、0887A「h h h あったよね？なんか：」、0889A「[なんじゃタウン]みたいになかったっけ：」といった、相手発話の受け入れに対し抵抗する表示が見られる。これらの表示は受け入れを不可とする上での強い確信を伴うこと(どこかで見聞きしたことを表す)の証拠ともなっている。

data 5のような聞き返しにおいて発話末イントネーションを見ると、下記図3に示すように、発話最終拍の母音が伸びた緩やかな上昇調となっている<sup>[注7]</sup>。

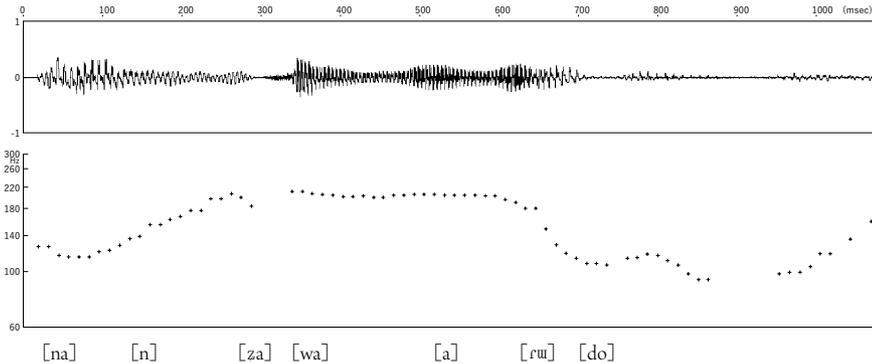


図3 「不審・不満」のピッチ変動

#### 4.4 面白がりの表示

下記data 6のように、普段の会話には会話参加者の一方が相手の発話を受け入れるか否かにかかわらず(それは横に置いて)、相手発話そのものに対して面白がっていることを表示するような場合がある。

data 6

- 1338B 火バサミ(.)火バサミってあるじゃない
- 1339A h h h h 火バサミね
- 1340B 火バサミの
- 1341A うん
- 1342B かたっぽのハサミの方に
- 1343A うん
- 1344B ボックスがついてんのよね
- 1345A h h h h h ボックスがついてんの？
- 1346B うん
- 1347A うん
- 1348B だから拾ったものすぐ(.)ボックスに
- 1349A ボックスにh h h h
- 1350B 入れれるっていう
- 1351A あ：そうそれ何どんなものでも拾えんの？それは

data 6の会話参加者の間には、Aの唐突な質問に対し、Bがどう応じるかという役割関係が共有されており、両者はある種の制限を課したやりとりを楽しんでいる。このようなやりとり中でAはBに最近何かおもしろい発明をしたことに関する説明を唐突に求め、Bがそれに応じている。Bは自分がいう火バサミが特殊であることを1344B「ボックスがついてんのよね」と説明する際、「ボ」に力みを加えて際立たせている。それに対し、Aは1345A「h h h h h ボックスがついてんの？」と笑いながらBによる際立たせを模倣し、聞き返している。このAによる聞き返しの発話末の上昇調を示したものが図4である。図4のように、相手発話そのものに対して面白がっていることを表示する場合、前述の「驚きの表示」に見られた、発話最終拍での急激な上昇や、「不審・不満の表示」における、発話最終拍での母音が伸びた緩やかな上昇といった特徴は見られず、上昇調に限っては、data 4「聞き取れない・字義の意味が分からない表示」に現れる上昇調に近い形態をとっている。しかしdata 6からは、聞き返しに伴い、笑いや模倣が直前の発話における、特定の語彙選択、その音声的際立たせ

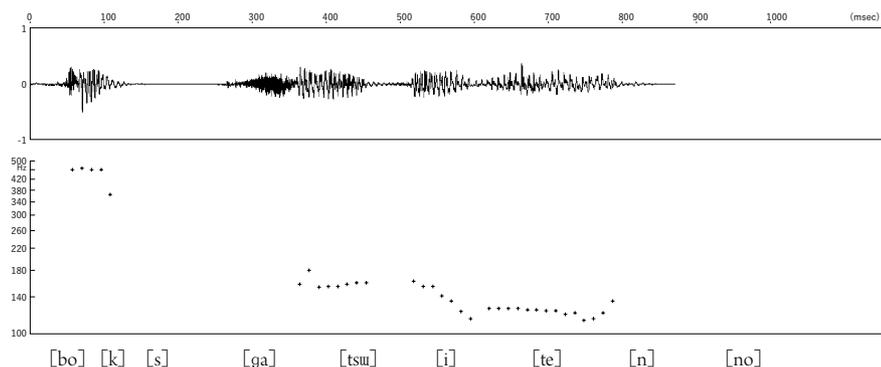


図4 「面白がり」のピッチ変動

によって引き出されていることが分かる。第一発話部が特定の第二発話部を要求することは隣接ペアが持つ特徴であるが、data 6では、一方の発話に生じる際立たせに対する他方の面白がりの表示として隣接ペアの第二発話部を形成している<sup>[註8]</sup>。仮にBによる際立たせに対してAが上記のような聞き返しをせず、「どのように使う?」といった発話をした場合には、Bが行った際立たせがAにどのように受け取られたかが顕在化しないために、Bが意図的に行った操作に対するねらいとしたフィードバックが実現しないことになる。

このような場合に生じる聞き返しは、笑いを伴うことから復元自体は完了している状態であり、この点において相手発話の受け入れに対する判断に関わる「驚きの表示」や「不審・不満の表示」と共通するものの、相手とともに表示の仕方の珍奇さを面白がり、楽しむことに主眼がある点において、データベースとの関わりで発話を受け入れるかどうかを処理していることとは異なる処理であると言える。

## 5 聞き返しを理解する上での指針

ここまでにあげた発話機能と発話末イントネーションにおける上昇形式の関わりを考慮すると、相対的な違いではあるが、ある音相により特定の発話機能

を果たす聞き返しが表示される場合があることが分かる。具体的には、「驚きの表示」において、発話最終拍における上昇調が急激な上昇となる一方、「不審・不満の表示」においては、発話最終拍の母音が長く伸ばされる緩やかな上昇となっている。また「驚きの表示」と「不審・不満の表示」との間においては、相手発話に対する受け入れを不可と判断する上での確信の程度差により、単に受け入れ不可であることが示されるのか、あるいは受け入れに対する抵抗が示されるのかといった点で異なっていた。これら確信の程度と発話末イントネーションに見られる上昇調の特質に基づくと、「驚きの表示」と「不審・不満の表示」の聞き返しは、それぞれ以下のように相互に位置づけられる。

- ・受け入れ不可とする強い確信がない→急激な上昇（驚き）
- ・受け入れ不可とする強い確信がある→緩やかな上昇（不審・不満）

さらにここで、従来、聞き返しとして主に取り上げられてきた「問題処理の方策」としての聞き返しに関し、その発話末イントネーションにおける上昇調の特質を考慮すると、前掲の図2にあるように、「問題処理の方策」としての聞き返しには上昇するものの、急激や緩やかといった特質が見られない。これは相手発話の復元が問題となり、受け入れ可否といった判断を行いようがないからであると考え、聞き返しの発話末イントネーションに見られる上昇調の音相と発話処理段階との対応関係は次のように説明できる。つまり急激や緩やかといった発話末イントネーションにおける有標の上昇調は、より高次の発話処理を行う際に生じる音相であって、発話処理段階において初期段階にあたる相手発話の復元に関わる段階には生じない。「問題処理の方策」としての聞き返しでは、その代わりに音声的に無標の上昇調が生じることとなる。

よって、聞き返しを理解するにあたって「驚きの表示」および「不審・不満の表示」となるものについては、発話末イントネーションの上昇調における特質を指針に判別すればよいと考えることができる。ただし上昇調が無標となるエコー型聞き返しは、「驚きの表示」および「不審・不満の表示」でないことは分かるかもしれないが、必ずしも発話機能の特定に結びつかない。そのため上昇調が無標となるエコー型聞き返しの発話機能を判別するには、笑いの有無

や発話の仕方における模倣、といった、他の表出上の特徴との関わりから発話処理段階を検討することが必要となる。この点に関する考察については稿を改めることとしたい。

## 6 まとめと今後の課題

本稿ではエコー型聞き返しについて、会話における役割として従来的に取り上げられてきた「問題処理の方策」である「聞き取れない・字義的意味が分からない表示」のほかに、発話者の相手発話に対する処理段階の異なりに応じて、「驚きの表示」、「不審・不満の表示」、「相手発話に対する面白がりの表示」、といった多様な役割を果たしていることを述べた。またそれぞれの発話機能を果たす聞き返しに関し、発話末イントネーションの操作、笑いの有無、発話の仕方における模倣の有無といった表出上の特徴をもち発せられていることを指摘した。さらに表出上の特徴のうち、発話末イントネーションの操作に関して、「驚きの表示」、「不審・不満の表示」における相互の位置づけを提示し、ここから聞き返しを理解する上で、「驚きの表示」および「不審・不満の表示」となる聞き返しについては、発話末イントネーションの上昇調を指針に判別しうることを述べた。今後は発話機能の分類カテゴリーごとの発話末イントネーションの類似を検証し、聞き返しを理解する指針としての妥当性を明らかにすることを課題としたい。

〈東北大学大学院生〉

### 注

[注1] …… 尾崎 (1993) より引用者がまとめたもの。

[注2] …… 尾崎 (1993) は「「反復要求」か「説明要求」かがあいまいな「聞き返し」は母語話者から「反復」を引き出す可能性がかなりあり、それが「聞き返し」連鎖につながるケースが多い」(尾崎 1993: 28) ことを指摘している。また特に「相手の発話 (の一部) をそのままオウム返しにするもの」(尾崎 1993: 26-27) であるエコー型の成功率が低いとされている。

[注3] …… 大津は「4Kの発話は確認を求める表現形式を取ってはいるが、本当にFに確認してもらおうという意図はない。」(大津 2004: 48) と述べている。

[注4] …… 田窪 (2005) では「「はっ」「えっ」など促音をつけると受理には成功したがデータベースにリンクし処理できなかったことを表す」(田窪 2005: 19)、「これが「ええっ」となると、さらに自分のデータベースへの繰り入れが困難であること、たとえば聞いたことが信じがたいことを表す」(田窪 2005: 19) としており、発話に関する復元 (確定) の処理と判断する処理とが区別されている。

[注5] …… 尾崎・椿 (2001) は、「理解に問題を感じた聞き手が話し相手に反復あるいは説明を要求しているならば、「え？」は「聞き返し」であるが、相手の発話に対する疑念や不同意を表している場合には「聞き返し」とは言えない。」(尾崎・椿 2001: 29) としている。

[注6] …… 会話時間の下限は20分以上となるようお願いした。

[注7] …… Nick (1997) でも「躊躇やためらいがある発話には音韻時間長の長い音素が出現する傾向があると考えられる」(Nick 1997: 69) と述べられている。

[注8] …… 水川 (1993) では隣接ベアの観点から、笑いが冗談を主な第一部分とする第二部分とされており、第二部分は第一部分が分かったという証拠となるため、冗談の後に続く笑いはおかしさを表出すると同時に前の発話が冗談であると分かったということを示すと述べられている。

### 参考文献

- アクトーアン, ブナル・大浜るい子 (2008) 「日本語会話とトルコ語会話に見られる繰り返しとその応答について—依頼場面を中心に」『日本語教育』137, pp. 1-10. 日本語教育学会
- 大津友美 (2004) 「親しい友人同士の会話におけるポジティブ・ボライトネス—「遊び」としての対立に注目して」『社会言語科学』6 (2), pp. 44-53. 社会言語科学会
- 尾崎明人 (1992) 「「聞き返し」のストラテジーと日本語教育」カッケンブッシュ寛子・尾崎明人・鹿島央・藤原雅憲・粉山洋介 (編) 『日本語研究と日本語教育』 pp. 251-263. 名古屋大学出版会
- 尾崎明人 (1993) 「接触場面の訂正ストラテジー—「聞き返し」の発話交換をめぐる」『日本語教育』81, pp. 19-29. 日本語教育学会
- 尾崎明人・椿由紀子 (2001) 「電話会話における初級日本語学習者の「聞き返し」と「聞き返し」回避」『日本語・日本文化論集』9, pp. 25-45. 名古屋大学留学生センター
- 串田秀也・定延利之・伝康晴 (編) (2008) 『シリーズ文と発話第一巻 活動としての文と発話』ひつじ書房
- 田窪行則 (1992) 「談話管理の標識について」文化言語学編集委員会 (編) 『文化言語学—その提言と建設』 pp. 1110-1097. 三省堂
- 田窪行則 (2005) 「感動詞の言語学的位置付け」『言語』34 (11), pp. 14-21.
- トムソン木下千尋 (1994) 「初級日本語教科書と「聞き返し」のストラテジー」『世界の日本語教育』4, pp. 31-43. 国際交流基金
- キャンベル, ニック (1997) 「プラグマティック・イントネーション」音声文法研究会 (編) 『文法と音声』 pp. 55-74. くろしお出版

- 水川喜文 (1993) 「自然言語におけるトピック転換と笑い」『ソシオロギス』17, pp. 79-91.  
ソシオロギス編集委員会
- 南不二男 (1985) 「質問文の構造」水谷静夫 (編) 『朝倉日本語新講座4—文法と意味2』  
pp. 39-74. 朝倉書店
- Gumperz, J.J. (1982) *Discourse Strategies*. Cambridge: Cambridge University Press.
-